

ゆ

悠々として
遊びごろと
優しさにあふれる
人びとの
かがやき

ゆ

Vol. 3

ゆ
う
ゆ
う

ば
り
ま

鳥取県湯梨浜町

ゆ

ゆ
う
ゆ
う、
はり
ま

悠々として

遊びどころと

優しさにあふれる

人びとの

かがやき

ゆ
う
ゆ
う、
はり
ま

鳥取県湯梨浜町



ゆうゆう、ゆりはま

鳥取県のまんなか

日本海に面した湯梨浜町は

趣ある湖のほとりに全国でもめずらしい

湖中温泉(湯梨浜の「湯」が湧き、

里には二十世紀梨をはじめとする

おいしい果実(湯梨浜の「梨」が実り、

日本海に面して

美しい白浜(湯梨浜の「浜」がつづきます。

陽がさんさんと降りそそぐこの風土のなか、

活躍をつづける人びとを取材し、まとめたのが

この「ゆうゆう、ゆりはま」誌です。

第1巻(2018年刊)、第2巻(2019年刊)は
とくに女性たちの輝きにスポットを当てましたが、
この第3巻では、
「忘れてはいませんか」と男性陣も
たくさん登場していただきました。

ゆうゆうとは、

おおらかな「悠々」。

あそびごろの「遊々」。

やさしい「優々」。

さまざまな場面で、さまざまなひらめきのもと、
たくさんの「実り」を生む
熱い「ゆうゆう」たちの報告です。

4 ゆうゆう、ゆりはま

一章 すこやか

- 10 次の夢は、グラウンド・ゴルフの国際組織を作ること。
 12 すこやかな心身を養う体操の、はつらつとした指導者だ。
 14 ウォーキング・リゾートとして、東郷湖の魅力を世界に発信してゆく。
 16 誰かがやらないといけないなら、やれることは断らない。
 18 サーフインと出会って、人生が変わった。その歓びを伝えてゆく。

二章 ふくよか

- 22 ビートルズとメキシコ料理。決断力と謙虚さ。
 24 1品1品、ていねいに。美味しい時間を過ごしていただく。

三章 たおやか

- 26 人生第2章をこの地と決め、コミュニティづくりに奮闘する。
 28 フルーツ王国の素材を生かし、安心してわが子に食べさせられるケーキを。
 30 美味しいメニューの仕上げは、ここからの眺めです。
 34 早寝早起き・晴耕雨読。私らしい暮らしに還れました。
 36 朝露に包まれるバラ園は、光と色彩のドラマだ。
 38 木は何にでもなる。何を作ろうか考えるのが楽しくてたまらない。
 40 元鑑識課写真係は日本海の芸術写真を撮り続ける。
 42 趣味は、「問題解決」。東郷湖への愛が止まらない。
 49 人びとの、豊かな時間を

三章

た
お
や
か

この世の中は
美しさでいっぱいだ
と思いたくなる

早寝早起き・晴耕雨読。
私らしい暮らしに還れました。

エステティシャン・
着物着付師
酒井千里

酒井千里さんは、京都の一流ホテルでの接客業を皮切りに、「面白そう」なものにハマりのめり込み、都会での日々を楽しみ尽くした。藍染めとの出会いから着付けを極め、オーガニックなコスメを知ってエステティシヤンの資格を取る。体のことや食べ物のことに興味を持った時、故郷・泊が魅力あふれる町であることに気づいた。「空き家バンク」で古民家を見つけ、Uターンを決めたのは、2018年の秋。父からの引越越し祝いは、なんと「耕運機」だ。畑で悪戦苦闘していると、「何植えるだろ〜え?」「今なら、これ植えない」と近所の人たちが気軽に声をかけてくれる。花の苗を持ってきてくれたと思えば、翌日には庭の隅に植えてくれ、名札まで立ててくれる。

「やさしいんです。かと言って押しつけがましくない」

着物のためにあれこれ髪型を工夫していたが、思い立って金髪のショートに。「そしたら色合わせがラクになって。敬遠していた色もバッチリ着られるようになりました」

トレードマークになり、遠くからでも知り合いが手を振ってくれる。

「畑でちゃんとモノが作れて、着付けやエステの仕事もマイペースで続けていければ」と、緩めの泊時間を満喫している。コンピニまでは車で10分。不便も楽しむ余裕ができた。

「日の出近くに起きて、夜更かしもなし。ネオンは見えなくなったけど、きれいな星が降るのがよく見えるようになりました」



朝露に包まれるバラ園は、
光と色彩のドラマだ。

バラ園
藤井勝美
藤井久野

その広大で壮麗なバラ園を目撃した人は、
きっと大きな組織が運営しているにちがいないと思うことだろう。すべて個人の「道楽」
で始め、続けられていると知ったら呆気にとられ、感動する。営業ではないから、見学は自由。
花が好きでしたらぜひどうぞ、なのである。
保育園の園児たちから高齢の方々まで、そして
障がいのある方々などさまざまな見学者が
口コミで訪れる。だれもが、「おかげで元気を
もらいました」と帰ってゆくが、「なんの、元気を
もらったのはこっちのほうです」。藤井勝
美さんは穏やかに笑う。

農水省に長く勤務し、東京はもちろん、東北
へ、北陸へ、九州へと全国に転勤し、退職後
4年間、姫路で働いた。「すべてを勤め上げたら

のんびり花でも作って暮らそう」とは、ずっと
頭の片隅にあったことだ。それが実現したのは、
最後の仕事先の姫路でみことなバラ園に出会った
ことが大きかった。「花の色に圧倒されました」。
実現まではもちろん試行錯誤を重ねられた。
始めたら始めたで大変な作業の連続。真夏の消毒では気が遠くなりそうに…。
「思いこんだら脇目もふらず突き進む人で、
はらはらしてしまいます」という久野夫人の証言がある。
たしかに、この規模の園を築くのはいいかげんな
気持ちではとうてい無理だったとは容易に想像できる。

バラは美しさの底が深い。「とりわけ、朝露に
包まれている姿は言葉に尽くせません」。その
光と色彩のドラマが、すべての原動力だ。

木は何にでもなる。
何を作ろうか
考えるのが楽しくてたまらない。

木工作家
朝倉康登



味のある風貌もそうだが生き方そのものが
縄文人のようだ、と朝倉康登さんを評する人
もいる。もちろん誉め言葉だ。俗世間とは無縁
の純粋な野人である。畑で野菜を作り、山で
イノシシを獲り、海や湖で魚を釣り、それらが
食卓に並ぶ。そして、野山に出ない時間のほと
んどは木工工房で木を削る、木を眺める、木と
語る。まるで木そのものに同化してしまうの
ではないかと思えるほど。

1人の女性と出会い、結ばれたのは20代初め。
新妻の両親は栃木県益子町の著名な陶芸作家
だった。陶芸夫婦は木をめぐって愛するムコ
殿に「木のスプーンを作ってみたら」と軽い
調子で勧めた。軽い調子だったが、モノづくり
師の2人はムコ殿の才能を見抜いていたのだ

ろう。思ったとおりすぐに熱中した。これが
売れた。さあ、それからはまっしぐらの自己
研鑽が始まる。独学で、ありとあらゆる家具や
日用品を作った。「木は何にでもなる。何を作る
か考えるのが楽しくてたまりませんでした」。
ぐんぐん実績を積んでいく。野外のクラフト
フェアなどに出展すると、高い評価を受ける。
「彼の作品には技巧だけではなく、心が漂って
いる」とは、ファンの1人の評だ。木工作品の
聖地ともいわれる東京銀座のデパート松屋で
展示即売もやり、手応えは十分あった。いま
いちばん作りたいものは？

「そうですね、自分にしかできない皿かな。
まあ、年齢とともに作りたいものがあるいろ
変わってくるんですが」

元鑑識課写真係は
日本海の芸術写真を撮り続ける。

写真家
山本浩一



1952年、鳥取市街地のほとんどを焼き尽くした「鳥取大火」が発生した。農家生まれの山本浩一さんが警察の仕事に就いたのはその直後だった。

「大火で鑑識課の資料が大量に焼失しました。臨時職員としてその復元の仕事を勧められたのがはじまりです」

過酷な業務を果たしたあと、正式職員の試験を受けて採用。そして引き続き鑑識課の写真係を拝命する。無残な現場をも冷静沈着な目で映像に刻む。ここですでに写真というものの本質と深く向き合っていたにちがいないが、運命はある人との貴重な出会いを用意していた。山陰の自然を撮り続け、日本の芸術写真の草分け的存在である、鳥取県が生んだ巨匠・

塩谷定好(しおたにていこう)氏だ。

「ぼつりぼつりと話される先生から……」抱えきれないほどの薫陶を受け、本格的に写真の世界に踏みこんでいった。

日本海を撮った。撮り続けた。「どの季節もいいが、やはり怒り狂った冬の海がいちばん」。長時間ひとり海に向き合っていて、「あの人、身を投げようとしているのでは……」と心配されたこともある。

鳥取県展で入選すること数知れぬ実力派。現在は、後進の指導者的な立場でも活躍している。温厚な名指導者は、むろん現役の作家であり続ける。「歳を取って人恋しくなったせいか、このごろはよく人物写真を撮っています」。映像に写るのは、人の温もりだろう。

趣味は、「問題解決」。
東郷湖への愛が止まらない。

漁師のおっちゃん
中前雄一郎



釣り・潜り・手づかみの魚ざんまい。子ども
の頃から東郷川を遊び場に育った中前雄一
郎さんの肩書は、「漁師のおっちゃん」だ。

「正確な職歴は、漁師↓教師↓漁師です」と
言うが、今でも野外活動のガイドやゲスト
ティーチャーとして引っぱりだこの日々。

「東郷湖・天神川サケの飼育放流プロジェクト」
を立ち上げ、魚道をサケやコイが上って
いく感動の瞬間を多くの人に披露もする。

「ここには、環境省のレッドリスト（絶滅の
恐れのある野生動物のリスト）にある希少
種がたくさんいる」と、魚を獲って写真を
撮って、『地域限定手づくり魚類図鑑』まで
作った。

東郷町で生まれ育ち、小学校の校長を退任

してから、漁師&教師の合わせ技で、近辺の
生き物の環境に熱意を傾けている。

「趣味は問題解決!!」と胸を張り、魚の種類も
写真の技術も、すべてが独学だ。東郷湖のす
ごい魚や鳥のことを、より多くの人に伝えた
いと、日本全国を2周半まわった。

「東郷湖は宝。日本海もいい。森に行けば、湯
梨浜の、まちの鳥」サンコウチョウ（三光鳥）
にも会える」

なぜサンコウチョウかと言えば、湯梨浜町
は、2004年に羽合町と泊村と東郷町の
3つが合併して生まれた町だから。

「次は『手づくり鳥類図鑑』を作ります。夢は
これらの印税生活ですが、行政で買い取っ
てくれるから無理ですな。あはは」







人びとの、豊かな時間を

わたしたちの町・湯梨浜町は、2004年に3つの町村が合併して誕生しました。趣豊かな東郷湖。めずらしい湖中温泉。抒情的な伝承。世界的スポーツ発祥の丘。

などなど、わたしたちが愛してやまない風土が広がっています。その空のもと、日々輝いている人びとの豊かな時間をご紹介しようと2018年に出発したのがこの「ゆうゆう、ゆりはま」の1冊です。発刊を重ねて、今回がVol.3。1巻・2巻と同様、魅力的な笑顔があり、思わず引きこまれる物語があります。すべての湯梨浜人が、いかに熱意とアイデアをもって活動が続けておられるか、そのころざしを感じ取っていただければ幸いです。

湯梨浜町長

宮脇正道



鳥取県湯梨浜町

<https://www.yurihama.jp>